

A Study of the Techniques of Gold Drawing
Buddhist Painting in Early Choson
Period: Comparison of Amida-nyorai (Skt.
Amitabha) and Eight Bosatsu (Skt. Bodhisattva) in
Enryaku-ji Temple and Yakushi-nyorai (Skt.
Bhaisajyaguru) Triad, Eight Bosatsu, and Twelve
Divine Generals in Kyoto City University of Arts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 姜, 恩實, 竹浪, 遠, 高林, 弘実, Kang, Eunshil メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/247

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



朝鮮前期金泥線描仏画の画法研究

一比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」と京都市立芸術大学芸術資料館所蔵「薬師三尊八大菩薩十二神将像」の比較を通して—

A Study of the Techniques of Gold Drawing Buddhist Painting in Early Choson Period: Comparison of *Amida-nyorai* (Skt. *Amitabha*) and *Eight Bosatsu* (Skt. *Bodhisattva*) in Enryaku-ji Temple and *Yakushi-nyorai* (Skt. *Bhaisajyaguru*) Triad, *Eight Bosatsu*, and *Twelve Divine Generals* in Kyoto City University of Arts

Eunshil Kang 姜 恩實

Haruka Takenami 竹浪 遠

Hiromi Takabayashi 高林 弘実

はじめに

朝鮮半島では三国時代（4世紀～668）に仏教が伝来（高句麗：372年、百濟：384年、新羅：527年公認）して以降、各時代にわたり特色のある仏教美術が制作されてきた。次の高麗（918～1392）では、中国の宋、元時代の絵画に影響を受け、王室や貴族の発願によって金泥や彩色を多用し豊かな装飾性を備えた仏画が制作された。高麗の滅亡後に建国された朝鮮（1392～1897あるいは1910）は、儒教を指導原理として約500年間にわたって抑仏政策を実施した。それにもかかわらず、王室では仏教行事が行われており、特に王妃をはじめとする女性たちは、信仰が深く、仏教美術も盛んに制作された。なかでも、16世紀の文定王后（1501～1565、即位1517～1565）時代は、仏教の復興した時期である。特に嘉靖44年（1565）には、彼女の発願によって金泥線描仏画200幅、彩色仏画200幅の仏画が作られた。現存作は、韓国内外に6幅が知られるのみだが、朝鮮前期（1392～1592）仏画の最も重要な制作に当たる。

この朝鮮前期仏画の特徴として、金泥による線描を主体に画面全体を描き込む線描仏画が制作されたことが挙げられる¹。筆者は京都市立芸術大学の保存修復専攻の修士在学中に、本大学芸術資料館に所蔵される嘉靖40年（1561）、文定王后発願の金泥線描仏画「薬師三尊八大菩薩十二神将像」（以下、京芸本）の技法研究を行い、その成果を昨年（2018）3月の韓国文化財保存科学会で発表した²。その中で、京芸本の画絹は織り目が一定で、目が比較的詰んでいること、全面に朱の裏彩色が行われていることを指摘した。墨による骨描き線（下描き線）は確認できなかったため、金泥で直接描いたと考えられる。また、金泥の使用法については肉身や輪郭線は表から塗っ

ているが、雲の部分は裏彩色を行っていることも判明した。この時期の金泥線描仏画の地色に朱が使われていることは従来も指摘があったが³、その具体的な彩色方法が判明したことで、京芸本の技法がほかの朝鮮前期の金泥線描仏画とどのような関係にあるのかが次の課題になった。

昨秋、比叡山延暦寺国宝殿において、嘉靖11年（1532）の銘をもつ「阿弥陀八大菩薩像」（図1）が展示された。京芸本より約30年早く、画記が残っている朝鮮前期金泥線描仏画の中で最古の作例である。近年保存修理を経て公開されたとのことで、同寺の許可を得て、作品調査を実施することができた。

本稿では、この比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」（以下、延暦寺本）について自然科学的調査の結果をもとに、京芸本「薬師三尊八大菩薩十二神将像」との比較を通して朝鮮前期金泥線描仏画の特徴を考察する。まず、第1章で延暦寺本の概要について整理し、第2章において、科学調査結果をもとに画法の検討を行う。その上で第3章において延暦寺本と京芸本の画法を比較し、延暦寺本とその後の金泥線描仏画との影響関係について考察する。

第1章 比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」の概要

本図は縦78.8×横55.4cmで、全体に金泥線を主体とする線描仏画である。阿弥陀如来を中心に左右各4体の菩薩が配され、光背の周辺と上下の余白には雲が描かれている⁴。

阿弥陀如来は、画面中央、高い方形台上の蓮華座に結跏趺坐し、光背は朝鮮仏画によくみられる箕形に描かれる。右手を胸まで上げ、左手はひざに載せ、両手とも親



图1.《阿弥陀八大菩萨像》 朝鲜·嘉靖11年(1532) 絹本金泥着色、縦78.8×横55.4cm、延曆寺

指と中指を接する下品中生⁵の来迎印をとっている。

前から第1列、主尊の左側（向って右側）には、化仏の載る宝冠をかぶり、左手に浄瓶を持つ観音菩薩が配される。対する右側には、勢至菩薩が配されている。勢至菩薩は、宝冠に水瓶を表し、経盒を持っている。その後列左右に文殊菩薩と普賢菩薩が配置されている。持物として如意と経盒をとる⁶。その後方、第3列には虚空蔵菩薩と金剛蔵菩薩が立つ。虚空蔵菩薩と金剛蔵菩薩の持物である刀と金剛杵は描かれておらず、合掌の姿勢を取っている。武器が省かれて、合掌手となるのは朝鮮時代に入ってから傾向である⁷。最後の第4列左側には、弥勒菩薩が位置している。高麗の八大菩薩においては、弥勒菩薩は蓮花を持つが、朝鮮時代に入ってから本図のように未敷蓮華（蓮のつぼみ）とする例が見られる。弥勒菩薩の向かい側には地藏菩薩が位置している。地藏菩薩は右手に錫杖を取っているが、左手は宝珠を持っていないのも朝鮮仏画の特徴とされている⁸。

本図は全体的に濃い茶系の絹地に金泥を主体にして描かれている。背景にある雲は金泥が薄く塗られており、主尊と八大菩薩の肉身はより金泥が濃く塗られている。主尊の髻珠は赤色を呈する。主尊の周りにいる八大菩薩の口唇も赤色である。阿弥陀如来の頭部、地藏菩薩以外の菩薩の頭部、観音菩薩の浄瓶、文殊菩薩の経典、弥勒菩薩の未敷蓮華は暗青色、地藏菩薩の頭部と八大菩薩の眉毛は暗緑色を呈する。これらの素材が何であるのかは本研究の調査課題である。

画面中央下部には長方形の枠線を金泥で引いた画記欄（文末補図）がある。画記の内容は以下の通りである。

尚宮金氏伏為
亡父金臣隱靈駕仗此仏恩生蓮
花中永脱輪廻超證仏果次因
存母裴氏宝体現享百歲
生覺岸抑亦己身消災難
壽命延長死蒙仏記当生
界之願画成弥陀会図一幀地
藏会図一幀粧嚴畢脩点
玉眼聞夫諸仏之鑑如月衆生
之誠若水々清月現今則臨
功豈磨損哉嗚呼至歎
嘉靖十一年仲冬有日謹跋

それによると嘉靖11年（1532）に尚宮（宮廷で働く女官）の金氏が亡父・金臣隱の冥福と存命である親母裴氏の長壽を願ひ、「弥陀会図一幀、地藏会図一幀」を発願して制作されたことがわかる。

この時期は、第11代朝鮮王である中宗（在位1506-1544）の治政で、儒教の影響により国家体制から仏教制度が排除されたが、内需司による王室の私的仏事は密に行われた⁹。発願者である金氏は宮廷で働く身分で私的な仏画制作が可能であったことから、高位の尚宮であった可能

性も考えられる。

第2章 自然科学的調査の実施結果

1. 調査方法

本図の画法を明らかにするために、以下の調査を実施した。

- ① 図様の特徴や全般的な保存状態、彩色方法の確認のために目視観察を行った。
- ② 骨描き線の確認のために赤外線撮影を行った。撮影に使用したデジタルカメラはSony社のα7Sに、イメージセンサーが持つ受光感度を全波長域に対して可能な限り引き出すためにイメージセンサーとマウント面の間にある全フィルターを透過率の高いフィルターに換装する改造を行ったカメラである。赤外線による画像を撮影するため、NEEWER社の赤外線透過フィルターをレンズの前に装着した。
- ③ 絹の組織、顔料の粒子の大きさや彩色の状態などをデジタル顕微鏡[SELMIC社製 カメラ：SE-3000（300万画素） レンズ：SE-40Z（×40～×240ズームレンズ）]で観察・撮影した。
- ④ 顔料の同定のために蛍光X線分光分析を行った。分析にはThermo Fisher Scientific社製Niton XL3-tを使用した。分析は、X線管球はAg、Miningモードで、4段階の光学フィルター交換機構（Main Range, Low Range, High Range, Light Range）により対象元素を切り替えて25秒ずつ（1箇所につき計100秒）測定した。照射X線のコリメーターは8mmφ、測定ヘッドと作品の距離を約1cm離した。

2. 結果および考察

(1) 画絹

本図に用いられた画絹を120倍拡大撮影した顕微鏡写真を図2に示す。経糸より緯糸の方が太いことが確認できる。40倍で撮影した顕微鏡写真で絹糸の5mm四方あたりの本数を数えると、経糸は約20本、緯糸は約20越であった。織り目が一定で隙間も少ない目が比較的詰んだ良質の絹と判断される。

(2) 骨描き線

金泥線描仏画の骨描き線の有無を確認するため、観察を行った。目視では、主尊の顔の左側にある金の欠損部で黒い線が観察された。この線は顔の右側の金の上に引かれた輪郭を表す線より太い。主尊の顔の赤外線写真（図3）では、主尊の顔の左側の輪郭、左眉毛、鼻と口部分の金の剥落部分に太い暗線が目視観察よりも明瞭に確

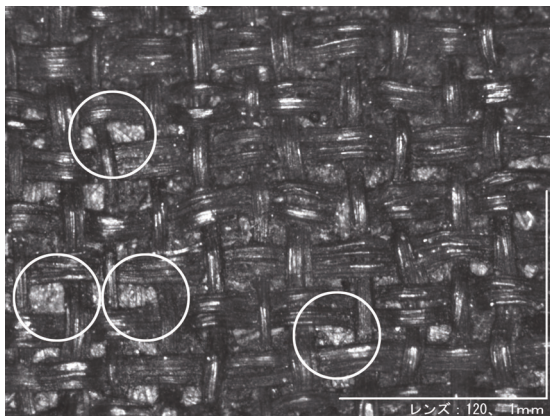


図2. 雲の間の背景の顕微鏡写真



図3. 主尊の顔の赤外線写真

認できた。次に、主尊の左側の第一列、観音菩薩の顔の赤外線写真（図4）では、顔の左右輪郭の周辺で金が剥落しており、その部分に太い暗線が確認できる。鼻の周囲の金が剥落している部分でも、小鼻の輪郭を表していると考えられる太い暗線が確認できる。また、主尊の右側、勢至菩薩の右足部分の赤外線写真（図5）をみると、足は金泥がほとんど剥落しているが、この剥落部にも骨描き線といえる線は確認できなかった。また図で矢印を示した線は服の輪郭線であるが、金泥が薄くなっている。この部分に暗線は確認できない。最後に、画記欄の赤外線写真を図6に示す。文字の筆画の金が薄くなっている箇所でも暗線は確認できなかった。

主尊の顔の金が剥落した部分にある黒い線の顕微鏡観察を行った。線は絹の上に直接引かれていた。このため、黒い線は描画の初めの段階で描かれた線と考えられる。目視で黒く、赤外線でも暗く記録される材料には墨があるため、墨による骨描き線と判断される。顔以外の部分では墨の骨描き線が確認できておらず、墨で骨描きをせず金泥のみで描いたと考えられる。

(3) 彩色材料及び技法

・地の部分

地の部分の彩色技法を明らかにするために、画面の上方の雲の合間の背景部分で観察を行った。目視では絹糸



図4. 観音菩薩の顔の赤外線写真



図5. 勢至菩薩の右足周辺の赤外線写真

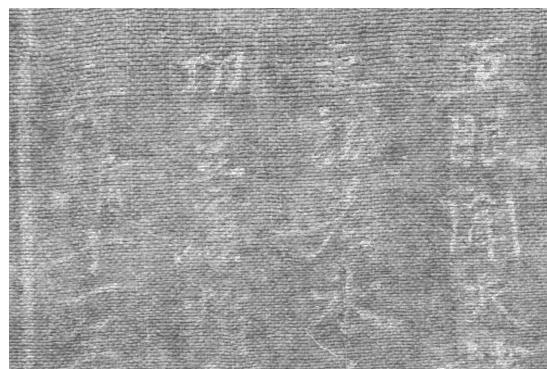


図6. 画記欄の文字の赤外線写真

の表面は暗褐色を呈していた。雲の合間の顕微鏡写真（図2）で画絹の絹目を見ると、○で囲った糸の隙間からは白い裏打ち紙が観察できるが、それ以外の部分では、絹目の間に裏打ち紙が見えない。つまり、絹と裏打ち紙の間に物質があることがわかる。カラー画像では絹目に赤色の粒子状の物質が確認できる。また、絹糸の上に粒子はほとんどない。この箇所の蛍光X線分析では水銀が検出された。これらを合わせると、朱で裏彩色がなされていると考えられる。本作は、平成29年（2017）から30年にかけて修理がなされており、その際の報告書にある修理中に撮影された絹の裏面の顕微鏡写真では、絹糸本来の肌色を呈している¹⁰。表では絹糸が暗褐色を呈するのは、焼けの可能性や染料が表に塗られている可能性が考えられる。なお、修理報告書には赤色の裏彩色があるこ

とも報告されている。

・背景の雲、菩薩の宝冠

背景には薄く金色を呈する雲が描かれている（図1）。地蔵菩薩以外の七菩薩がかぶっている宝冠の内部にも薄く金色を呈する部分がある。これらの部分の材料と技法を確認するために雲の部分で顕微鏡観察を行った。雲の内部の顕微鏡写真を図7に示す。絹糸の上に、地（図2）の部分では観察されない物質が付着していることが確認できる。この物質はカラー画像では金色の光沢がある粒子である。雲の内部の金色を呈する部分を蛍光X線分析で測定すると金が検出された。粒子状であり、金が検出されることから、図7で絹糸に付着している材料は金泥と考えられる。また、金泥は糸の上に付着していることから表から塗布されている。つまり、雲の内部には、表から金泥を薄く塗ったと考えられる。

・肉身

目視観察では、肉身部には剥落が多いが、保存状態の良い部分は金色を呈する。状態のよい肉身の絵具層には厚みがある。図8に示した主尊の左側第二列の菩薩の額、左耳、あごなど金の剥落部分では、目視で金の下に白い物質があることが観察された。主尊の首の剥落部分でも同様の白い物質が観察された。これらの剥落部分の顕微鏡観察では、白い粒子が絹糸の表面と絹目で観察された。また、金と白い粒子が共に剥落した部分では絹目から赤い粒子が観察された。

金色の材料および白い物質の同定のため、蛍光X線分析を金泥の剥落が生じている主尊の首で行った。図9にそのスペクトルを実線で示す。また、比較のために目視で白い物質が確認できない蓮華座の金の輪郭線を黒い点線、雲の間の地の部分のスペクトルを灰色の実線で示した。肉身および蓮華座の輪郭線のスペクトルには、大きな金（Au）のピークも検出された。また、3つのスペクトルには、水銀（Hg）のピークも検出された。さらに、3



図7 雲の部分の顕微鏡写真

つのスペクトルには鉛（Pb）の小さなピークがあるが、首のスペクトルの鉛のピークは、ほかの二つのスペクトルのピークと比較すると大きい。

肉身からは、蛍光X線分析では金が検出されたため、金が使われていると考えられる。光沢の具合と、肉身に金箔が重なっている部分が観察されないことから、金箔ではなく金泥が使用されていると考えられる。金の下には白い粒子状の物質が観察されたため、白色顔料で金の下塗りをしたと判断される。首の蛍光X線分析では、下塗りのない部分よりも大きな鉛（Pb）のピークが検出されたため、白色顔料には鉛白が使用されている可能性がある。顕微鏡で、絹目に赤い粒子が観察されたことから、肉身にも朱の裏彩色がされていると考えられる。白い下塗りについても修理報告書に言及がある。

一般的に金泥の粒子は非常に細かい。筆者が修士課程で京芸本の模写を制作した際には、下塗りをせずに絹糸、絹目、裏彩色の朱が見えないようにするためには大量の金泥を塗る必要があった。従って、下塗りは金泥の節約のため塗られたと考えられる。しかし、肉身に白色の下塗りをしたことによって絵具層がほかの箇所と比べて厚いため、巻き、開きが繰り返される中で絵具に亀裂が生

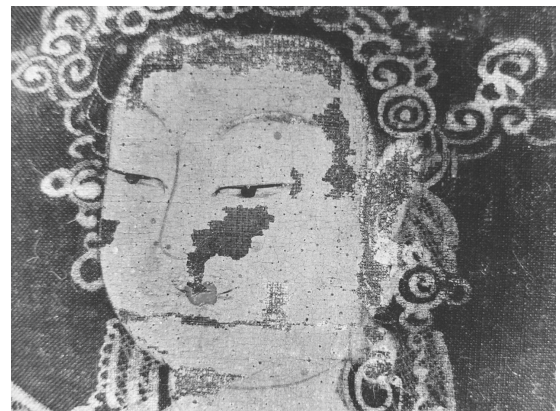


図8 菩薩（主尊左側第二列）の顔部分写真

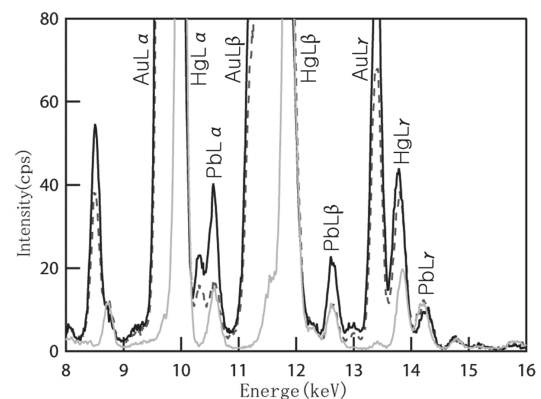


図9 主尊の首の蛍光X線スペクトル (Main Range)

- ・ 黒色の実線：主尊の首
- ・ 黒色の点線：蓮華座の輪郭線
- ・ 灰色の実線：雲の間の地

じ、剥落につながったと考えられる。

・主尊の髻珠

主尊の髻珠は丸形で、赤い絵具が塗られている。さらに、その上に金泥で線が加えられている(図10)。髻珠を顕微鏡で観察すると、絹糸の上と絹目の間に赤色の粒子が観察された。金の線は赤い粒子の層の上に観察された。この箇所の蛍光X線分析では水銀(Hg)と金(Au)が検出された(図11)。

顕微鏡で観察された赤い粒子は、水銀が検出されたため、朱と考えられる。顔料の粒子は絹糸の上にも観察されたので、表から塗られている。また、髻珠の模様を表す線では、金が検出されたため、金泥と考えられる。

・主尊および八大菩薩の頭部、眉毛、持物の彩色

主尊および八大菩薩の頭部には彩色がなされていることが目視で確認できた。主尊の頭部の彩色は暗青色を呈している。地藏菩薩以外の七大菩薩の頭部の彩色も暗青色である。地藏菩薩の頭部と八大菩薩の眉毛の彩色は暗緑色を呈している。

主尊および主尊の左側の観音菩薩の暗青色の彩色を顕微鏡で観察すると、青色の粒子が確認できた。観音菩薩

の頭部の蛍光X線分析では銅(Cu)、金(Au)、水銀(Hg)が検出された(図12)。青色の粒子が観察され、銅(Cu)が検出されたことから、青色の粒子は群青であると考えられる。Auが検出されたのは、宝冠に金が使用されているため、Hgが検出されたのは、裏彩色に朱が使用されているためと考えられる。

主尊の左側の地藏菩薩の頭部の暗緑色の彩色を顕微鏡で観察すると、緑色の粒子が確認できた。この部分の蛍光X線分析では、銅(Cu)が検出された(図13)。緑色の粒子が観察され、銅が検出されたことから、緑青が使用されていると考えられる。

地藏菩薩と主尊左側第二列の菩薩の眉毛には、暗緑色の彩色が目視で確認できた(図14、図15)。この2体の眉毛について顕微鏡観察をしたところ、緑色の粒子が観察された。蛍光X線分析は実施していないが、緑色の粒子が観察されたため、緑青が使用されているのではないかと考えられる。

八大菩薩のうち、観音菩薩、勢至菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩、弥勒菩薩は持物を持っている。そのうち観音菩薩の浄瓶、勢至菩薩の経盒、文殊または普賢菩薩の経盒、弥勒菩薩の未敷蓮華には暗青色を呈する彩色が観察された。観音菩薩の浄瓶(図16)では、瓶の中に絵具が塗っ

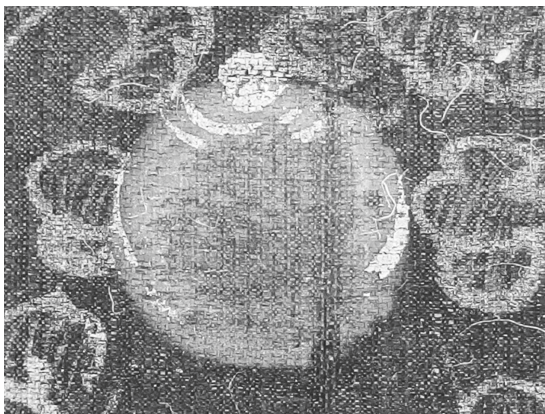


図10. 主尊の髻珠部分

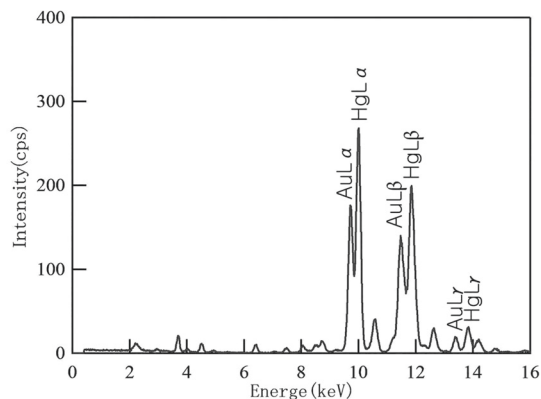


図11. 主尊の髻珠部分の蛍光X線スペクトル (Main Range)

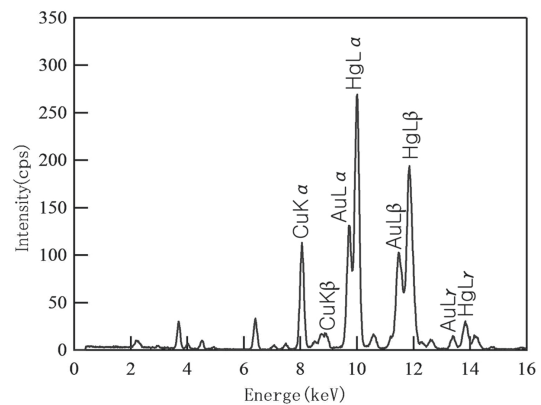


図12. 観音菩薩の頭部の蛍光X線スペクトル (Main Range)

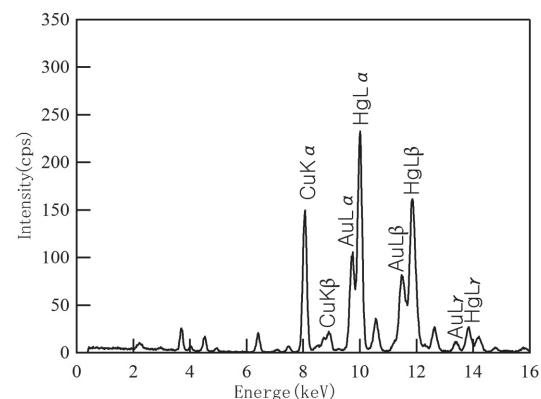


図13. 地藏菩薩の頭部の蛍光X線スペクトル (Main Range)

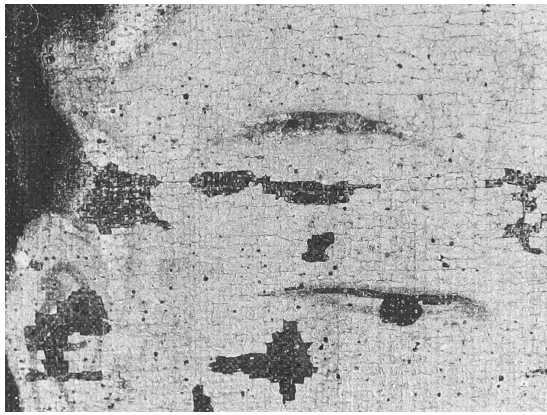


図 14. 地藏菩薩の眉毛の部分写真



図 15. 菩薩（主尊左側第二列）の眉毛の部分写真

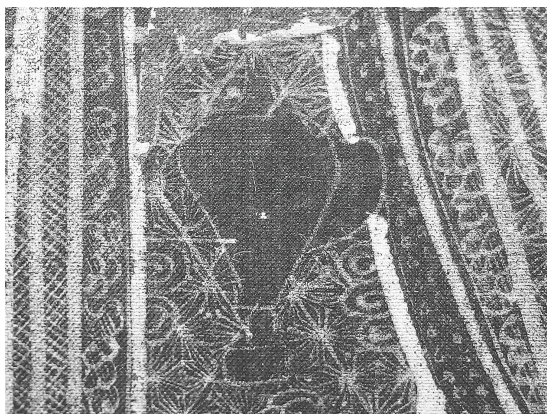


図 16. 観音菩薩の持物（淨瓶）の写真

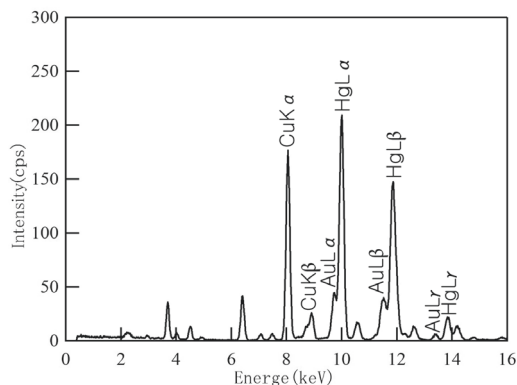


図 17. 観音菩薩の淨瓶の蛍光 X 線スペクトル (Main Range)

である。顕微鏡で観察すると、青色の粒子が観察された。蛍光 X 線分析では銅 (Cu) が検出された (図 17)。青色の粒子が観察され、銅 (Cu) が検出されたことから、群青が使用されていると考えられる。群青で彩色した後、金泥で細かい瓶の形を表す線が描写されている。

第 3 章 延暦寺本と京芸本の比較

1. 京芸本の概要

文定王后は、朝鮮 11 代王である中宗の三番目の王妃であり、13 代王である明宗（在位 1545~1567）の母后である。文定王后は 12 歳の明宗を補佐して 8 年間垂簾聴政を実施し、強大な権力を振った。王后は朝鮮の国是である抑仏政策を無視して仏教を好み、様々な仏教行事を行い、それに合わせて、数百点の仏画を発願して制作した。

京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵されている「薬師三尊八大菩薩十二神将像」(図 18) は中央下部に画記欄がある。画記によると嘉靖 40 年（1561）、文定王后が明宗の長寿と善政、厄災の消滅、王族の繁栄を祈り、王子の誕生を願って描かせた薬師如来図で純金画五幀、真彩画二幀で計七幀を発願した。そのうちの一幀である。図様は、左手に薬壺を取る本尊薬師仏を中心としている。本尊の尖った頭部とその上につく髻珠、顔の中央に集まっている目鼻口、箕形光背などに朝鮮仏画の特色が表れている。本尊の左側（向かって右側）に日光菩薩、右側に



図 18. 《薬師三尊八大菩薩十二神将像》
朝鮮・嘉靖 40 年（1561）、絹本金泥着色
縦 88.7 × 横 59.2cm、
京都市立芸術大学芸術資料館

月光菩薩を脇侍とし、周辺に八大菩薩と十二神将を配している。

2. 延暦寺本と京芸本の図様比較

延暦寺本と京芸本は共に濃い赤色系を呈する画絹に全体的に金泥を使用し、部分的に彩色を行っている。延暦寺本は阿弥陀如来、京芸本は薬師如来を主尊としているが、画面中央の蓮華座上に結跏趺坐する姿勢や通肩の衣、その後ろの箕形光背の形とその中に描かれている模様などが一致している。ただ、延暦寺本の主尊の衣の太い輪郭線はなだらかな曲線で描かれている（図19）。一方、京芸本の主尊の衣の太い輪郭線は角がある線で描かれている（図20）。

背景にある雲の形、八大菩薩の服の線と服の中の模様にも共通点が認められる。延暦寺本の八大菩薩はそれぞれ持物と宝冠に特徴が表れているが、京芸本の八大菩薩は全員合掌をしているため、菩薩の名前がわかりにくい。しかし、京芸本の八大菩薩のうち、第一列、主尊の右側の菩薩の宝冠には水瓶が描かれているため、勢至菩薩であることがわかる。また、京芸本の八大菩薩の目鼻口が中央に集まって朝鮮仏画の特徴を示すのに比べ、延暦寺本では京芸本より顔に丸みがあり、高麗仏画に近いバラ

ンスが保たれている（図21、図22）。

3. 自然科学調査を通じた画法の比較

延暦寺本と京芸本には、地の部分に共に全面に朱で裏彩色がなされている。絹は共に織り目が一定であり、良質な絹を使用したと考えられる。延暦寺本の絹目（図2）は5mm四方あたりに経糸が約20本、緯糸が約20越である。京芸本の絹目（図23）は5mm四方あたりに経糸が約22本、緯糸が約17越で、延暦寺本の方が京芸本よりやや目が詰んでいる。

骨描きについては、延暦寺本では墨による骨描き線が



図21. 延暦寺本の菩薩の部分写真



図22. 京芸本の菩薩の部分写真



図19. 延暦寺本の主尊の部分写真



図20. 京芸本の主尊の部分写真

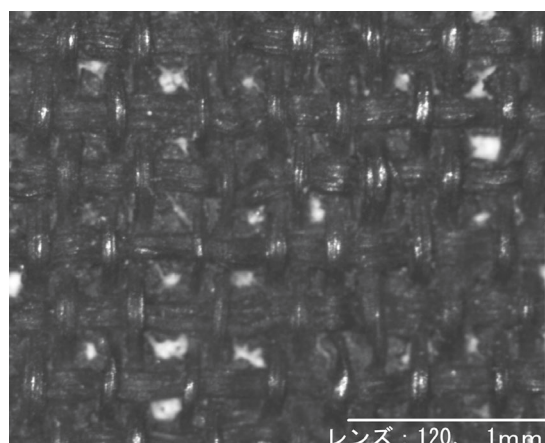


図23. 京芸本の画絹の顕微鏡写真

主尊と菩薩の顔の輪郭、眉毛、目、鼻、口で確認できた。これ以外の輪郭線では墨による骨描き線は確認できていない。京芸本では主尊と菩薩、神将の金泥の残りがよいが、菩薩と神将の眉毛、目、鼻に部分的に剥落がある。この部分では延暦寺本のような墨による線が確認できていないため、京芸本には墨による骨描きは行われていない可能性がある。

背景にある雲の内部については、延暦寺本では表から薄く金泥が塗られているが、京芸本では裏から金泥が塗られている。肉身の彩色については、延暦寺本では金泥の下に白色顔料による下塗りが施されているが、京芸本は下塗りがなく絹の上に金泥が直に塗られている。京芸本は金泥の剥落がほとんど起こっていないが、延暦寺本は下塗りが原因で金泥の剥落が多く発生したと考えられる。髻珠の赤い部分は延暦寺本と京芸本では共に朱が使用されている。

延暦寺本では主尊の頭部と、地藏菩薩以外の七大菩薩の頭部と持物を群青で、地藏菩薩の頭部と八大菩薩の眉毛には緑青を使用しているが、京芸本では主尊と八大菩薩、十二神将部分に緑青だけが使用されている。

おわりに

本稿では、朝鮮前期の金泥線描仏画の現在知られる最古の作例である比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」の画法や使用された色材を明らかにするため自然科学調査を中心に考察を行ってきた。最後に、その結果をもとに、今回の調査から見えてくる本図の金泥線描仏画としての位置づけや注目される点を総合的に考えて結びとした。

本図の画絹には、織り目が一定で、比較的目的の詰んだ良質の画絹が用いられていた。これは画記欄から分かる通り宮室関係者の金氏の発願のため、良質な画絹が使用されたと考えられる。また、墨による骨描き線は、赤外線写真撮影の結果、顔の部分のみに認められた。彩色技法においては、全面に朱で裏彩色がなされていることが分った。朱の裏彩色には画面の地を赤くし、金の発色をよくする意図があったと考えられる。目視による絹糸の暗褐色の現状も考慮すると、画面をより赤くするために、表に染料を塗っている可能性も考えられるが、今後の課題としたい。肉身と太い輪郭線は金泥を濃く塗り、雲と宝冠の部分には金泥が表から薄く塗られている。主尊と八大菩薩の顔の金泥の剥落部分から白い顔料が確認できた。この白い顔料は、金泥の使用量を節約する目的で塗られたと考えられ、素材は鉛白が使用されている可能性が指摘できた。

さらに、約三十年後に文定王後の発願で描かれた京芸

本「薬師三尊八大菩薩十二神将像」と、図像・画法の比較を行った。主尊の姿は似ているが、衣の太い輪郭線の筆線の質に違いが見られた。延暦寺本ではなだらかな曲線で、京芸本では角がある線で描かれているのは、画風展開上、今後も留意すべき点である。また、延暦寺本は主尊と菩薩の顔の部分に墨による骨描き線が確認できたが、京芸本では墨による骨描き線が確認できなかった。京芸本の画記によると、同時に七幀が発願された。時間の節約のため、墨による骨描き線は省略し金泥で直接描いたと考えられる。或は骨描き線が要らないくらい高いレベルの絵師が描いたとも考えられる。それらの理由としては、延暦寺本が描かれてから約三十年が経過し、宮中での線描仏画の技術が向上したことが想定される。

雲の部分では、延暦寺本が金泥を表から薄く塗るのに対し、京芸本は裏から金泥を塗っている。京芸本の画絹の織り目が延暦寺本よりやや隙間があるため、金泥の裏彩色の効果を利用して雲をより柔らかに表現したと考えられる。金泥を主体とし色や調子が単調になりやすい線描仏画の画面に、素材の特徴を活かしつつ変化をつけようとする意識がみられ、この点も技法の向上の一端とも解される。

延暦寺本の肉身の金泥では白色の下塗りがあり、京芸本の肉身には下塗りを行わず、金泥を絹に直接塗っていた。延暦寺本は白色を塗ることで金が薄くても発色し、材料を節約できたが、その分、剥落が生じており、保存上には欠点のある技法と言える。これに対して、京芸本は宮室の最高位にいた文定王后が作らせたこともあり、金泥を節約せず使用できたものと考えられる。

このように、京芸本のほうがどちらかと言えば進んだ技法やより豊富な素材を用いているように考えられるが、細部に注目すると、延暦寺本の菩薩の頭部と眉毛の色は緑青と群青を分けて塗っており、各菩薩の持物も多数描かれている。一方、京芸本の諸尊の頭部と眉毛は緑青の一角で塗られ、菩薩は持物を描かず全員合掌している。この点については、京芸本は画面中に多くの菩薩と神将を描いているため、色と図様を単純にして画面が複雑にならないようにしたと考えられる。

本稿では、朝鮮前期の線描仏画の中でも制作期に時間差のある2点を、図像と画法の点から比較しつつ考察を行った。今後も引き続き、朝鮮前期仏画の図像や画法について調査を重ねてゆきたい。

註

- 1 朴銀卿『朝鮮前期仏画研究』（時空社、2010年）。박은경『조선전기불화연구』（시공사, 2010년）。以下、ハンゲルの文献については、先に日本語訳を挙げ、後に原文を載せる。
- 2 姜恩實、高林弘実、竹浪達「文定王後の発願による京都市

立芸術大学所蔵〈薬師三尊八大菩薩十二神将像〉の画法研究」、第47回 韓国文化財保存科学会、2018年3月30日発表。

강은실, 타카바야시 히로미, 타케나미 하루카「문정왕후의 발원에 의한 교토시립예술대학소장〈약사삼존팔대보살십이신장도〉의 화법연구」, 제47회 한국문화재보존과학회, 2018년3월30일 발표.

3 鄭于澤「延曆寺所藏朝鮮前期金線描阿弥陀八大菩薩図の考察」(『東岳美術史学』第16号、2014年)140頁。정우택「연력사소장 조선전기금선묘아미타팔대보살도의 고찰」(『동악미술사』제16호, 2014년), 140쪽.

4 現状は上部が切り詰められており、さらに上部には余白状の補網が加えられている。図版1では、この補網部は省略した。

5 金廷禧『絢爛たる仏教美術の世界、仏画』(テーマ韓国文化社、2011年)、387頁。김정희『찬란한불교미술의 세계, 불화』(테마한국문화사, 2011년), 387쪽.

6 八大菩薩では、経典を持つのは文殊菩薩、如意を持つのが普賢菩薩とされるのが一般的であるが、梁希姪「韓国八大菩

薩図像研究」(ソウル大学大学院修士学位論文、2006年〔양희정〈한국팔대보살도상연구〉서울대학교대학원석사학위논문, 2006년])によれば、高麗仏画の八大菩薩では持物と配置は必ずしも固定化しておらず、確實なのは経典(或いは経典をのせる蓮華枝)と如意が文殊菩薩と普賢菩薩いずれかの持物となり、両菩薩は対をなす位置に配置されることであるという。77-78頁。梁氏の指摘を踏まえれば、朝鮮時代の両菩薩についても、持物と配置で尊名を確定するには慎重であるべきと考えるため本稿では、左右いずれが文殊か普賢かは保留しておくこととする。

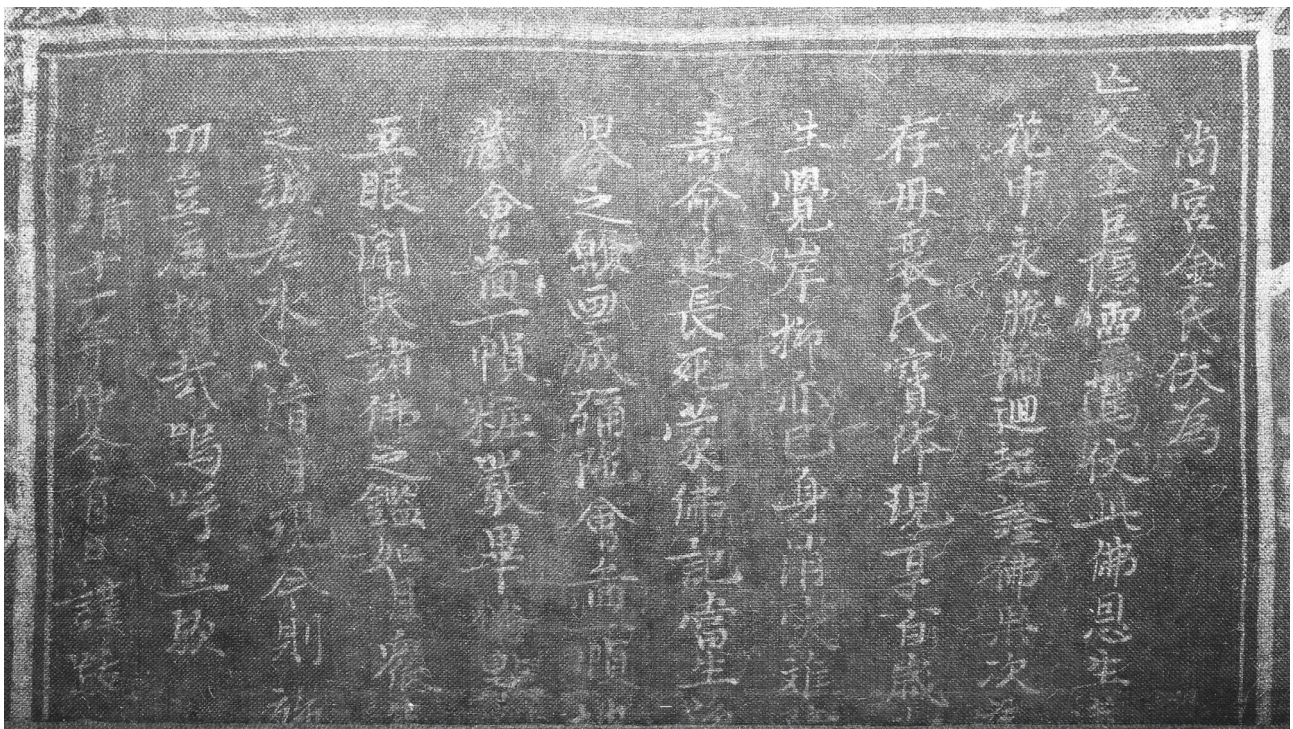
7 前註論文、93頁。

8 註6前掲論文、80頁。

9 ソンソンピル「16・17世紀仏教政策と仏教界の動向」(東国大学大学院博士学位論文、2013年)。

손성필「16・17세기불교정책과 동향」(동국대학대학원석사학위논문, 2013년).

10 修理報告書、『比叡山延暦寺蔵 絹本着色「阿弥陀八大菩薩像」掛幅装 1幅』(墨仙堂、2018年)。



補図 「阿弥陀八大菩薩像」画記欄